
『学園 - 秘められた物語 - 』

水無月ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『学園 - 秘められた物語 - 』

【Nコード】

N3844B

【作者名】

水無月ゆう

【あらすじ】

—— 異端児が集う学園に突然得体の知れない侵入者が現れる。主人公和弥は撃退しようと試みるがあっさりと逃げられたまま何事も起きずに一週間が経過した。

流石に何も起きないだろう—— と思った時事件は起きる。

—— 突然の殺人。

そこから連鎖する出来事。

親友の突然の失踪。

謎の侵入者の正体。

裏で暗躍する未だに見ぬ組織。

ここによくあるような学園アクション開幕。

侵入者

とある学園の屋上に二つの影があり激しい戦闘を繰り広げている。

一人は長身の青年で両手に二メートルを超す刀身が煌く。片方は細身で華奢な身体をした少年である。

二人は現実離れた出来事を真夜中に引き起こしているのだ。

青年が刀を振ると衝撃波となり床を抉る。そして少年はそれを素手でしのぐ。

普通ならありえない光景であろうがここ学園都市の人間にとっては見慣れた光景であった。

「不法侵入者が何の用だ？」

手から血が出ているが少年はそれに気に留める様子はまったくない。

少年の問いに青年はただ薄笑いするだけで何も答えない。ただ一言だけ残す以外は。

「ん、ああ・・・ある物がここにあるって聞いた。それだけさ」

言い終わると同時に青年は刀を少年の眼前に突き出す、少年はそれを手の甲でなんとか弾いた。しかし、その時には青年の姿は文字通り姿を消していた。

「くそっ！逃がしたかつ」

この時はたいした出来事ではなかったが直に大きな事件へとなる。

—

次の日の朝、少年——高橋和弥は浮かない顔で校内を歩いていた。

昨日の夜の出来事は、すでに校内に噂となつて流れている。

しかし、誰が誰と戦っていたのとか、詳しいことは謎に包まれたままだ。ただ、漠然^{ばくぜん}と噂だけがはしっていた。

——くだらないな…

噂に耳を傾けながら、和弥は歩いている。勿論^{もちろん}、目指してる場所は戦いの場所だった屋上。一日も経ってないので、昨日の痕跡^{こんせき}は残つてはらずだ。それを見るために、和弥は屋上を目指している。

——まあ、ここはこんなことが日常茶飯事だから、こんなことしなくてもいいけどな

和弥が通うここ『^{りっしょうがくえん}律翔学園』は国内でも名の知れた学園都市である。

普通の学園との違いは能力者を集めた学園になっている。別名『異端の学園』と呼ばれるほどの変わった学園都市だった。

何故、こんなにも国内の能力者が集められたのか理由は定^{さだ}かではないが、ここは百年以上も歴史のある由緒正しい学園でもある。

和弥もそんな能力者の一人だ。彼の能力は『ハーデス』と名づけられてもの。彼が念じて発した言葉はこの世に具現^{くげん}することが出来るのだ。この名前が付いたのは理由は、『破滅を願えば世界すら崩壊させる』と言われてるからだだった。

例えば、先の戦いで彼が衝撃波を防いだのもこの能力を使ったからである。

物心ついたときから、和弥はこの能力を使って生きてきた。違和感なく使いこなせるのは、能力が体の一部として認識しているからだろう。今、誰にも気づかれずに屋上に向かって歩いてるのも、現在進行形で能力を使っているからだ。

ようやくたどり着いた和弥は、昨日の侵入者の足跡を探るため屋上のドアを開けた。

「やっぱり、貴方だったのね」

と、予想もしない声が屋上から聞こえてきた。

声の主は浅野由佳^{あさのゆか}。この学園の高等部の生徒会長だ。

「昨日の夜に学校で何をしてたか知らないけど、学校でこれ以上問題を起こさないでくれる？」

眉を右上がりにし、和弥を軽くにらむ。

「俺が起こしたわけじゃない…」

彼女が苦手なのか、視線を合わせないように答える。

「でも、一枚噛んでるのよね？」

「……ああ」

由佳の追及は逃れられないと思い、和弥は素直に認めることにした。

「でも、仕掛けて来たのは向こうだからな」

と、自分に責任がないことを強調するのを忘れなかった。これ以上目をつけられたら、四六時中見張りをつけられかねない。

「そう…。詳しいことは聞かせてくれる？」

「……分かったよ」

まだ疑うが晴れてないのか、由佳は半信半疑にうなずいただけだった。

——まいったなあ

気づかれないようにため息をつく。

和弥が由佳を嫌がる理由は、由佳と和弥の能力の相性が悪いからだ。

由佳の能力は『デিশョンリクレイション』という空気中の物質を分解し再構築する能力だ。これで耳を塞^{ふさ}がれたら、和弥の能力は通用しない。ただ耳を塞ぐだけなら問題ないが、空気中の物質を利用するので、声の波動が届かないのだ。

「で、何があったの??」

いつまで経つても和弥が説明をしないので由佳が説明を促した。これ以上彼女の逆鱗^{げきりん}に触れたくないので、和弥はしぶしぶ説明を始めたのだった。

「昨日の夜、用事があって学校に言って見たら、屋上に侵入者がい

たのを発見して戦闘になった。ただそれだけだ。ここじゃよくあることだろ。生徒会長はこの侵入者の目的がなんだか分かるか？ 俺は聞く前に逃がしたから・・・」

と、簡単に経緯を由佳に説明し、和弥は意見を聞く。

「目的どころの前に、君はどうして顔確認しなかったの？」

その言葉には棘^{とげ}があつた。

和弥は不審者の顔は見えていない。 というより、確認できなかったほうが正しいだろう。

“ 昨日はいつもより曇^{くも}っており、陰があつたので見えなかったのである。 ” と、説明しても無駄なのは既に学習済みなのであえて言わない。 どう言い逃れをしようか考えているときにタイミング良く朝のチャイムが鳴った。

朝の調査はどうやらここまでのようだった。

「 っってことで、俺はここで遅刻したくないんで教室に戻る 」

と言って和弥は逃げるように、とゆうか実際逃げているのだが

そこはあえて気にせず、和弥は何事もなかったかのように屋上を後にした。

—— 目的は一体なんなのかしら

それとは反対に由佳は去っていく彼の姿を見て頭を巡らせてみたが、やはり授業が始まるので由佳も和弥にならって屋上を後にした。

∞

―― 一方、彼らは和弥と由佳を監視していた。

薄暗い部屋に広く無限かと思われる部屋に闇がどこまでも続く。

中央に光が灯る。しかし、それは光ではなく 炎だった。

炎は連鎖するように次々と順番に何も無い空中で灯る。そして全てが灯り終わると、人々がいることをようやく確認できた。

「彼らは厄介だな」

部屋に数人おり、その中でも異質な気配を漂わせる男が言う。

「だが奴ならやってくれるだろう」

「・・・そうだな。今は動向うごかうを見るしかないだろう」

一人が言い、皆がうなずいた。

そして、炎が次々と消えていった。

困惑

「はあ、あの女め！」

和弥はむしゃくしゃしていた。

そう、あの後指導室の教師に指導室まで呼びだされ、散々説教された。まず昨日はばれないように気配を消して学園に侵入したはずなのだが、何故か教師達にだけ筒抜けになっていたのだ。

原因は学園きつて以来の最強の生徒会長。

——浅野 由佳。

学園の高等部で知らない者はいない。

ようしたんれい
容姿端麗、ずのうめいせき
頭脳明晰。

学園入学試験もトップで通過し、入学以来常に学年主席の頭脳を持つ。ただ一つ運動神経は皆無に等しかったが、それを補う以上にバックには色々強力なやばいグループがいくつも付いているのだ。

まず敵にまわそうと考えるものはいない。その中で唯一彼女に楯突いたのが和弥であった。

周りの生徒は命知らずとかばやいていたが、和弥はただ彼女の高圧的な態度が気に入らなかった。

ただ、それだけである。

しかしそれがきっかけになり、それから由佳には色々因縁をつけられるようになっていった。

指導もその一例である。おそらく彼女に朝話したことを、彼女は無断で学園に侵入したことを教師に伝えたのだろう。学園きつての生徒会長の言葉なので、教師の中で彼女の言葉を疑うものは誰一人としていない。だから、こんな風に和弥が指導し室に行かなければならないことは、学園の日常的事にもなりつつあった。

あまり長くはない廊下を歩き、ようやく着いた教室はガランとしていて誰もいなかった。ろくに授業見日程を覚えてないので、次の授業を確認してみると移動教室だからだ。

自分の机まで行き中を探り教科書を取り出し、横にかけられているバッグを開ける。

とそのとき後ろに気配を感じた。後ろを振り向くといかにもやる気がなさそうな少年が立っていて、一言つぶやいた。

「……カズ次行く」

和弥はさほど驚きもせず答える。

「なあ啓いつも足音消して後ろに立つの止めてくれないか」

友人である小松啓はいつも無口で必要なことしか言わずしかも足音を消して歩く。凄いのか凄くないのかよく分からない少年だ。

和弥は啓が無言で教室から立ち去る様子に本日三度目の溜息を吐く。

立ち止まっても仕方ないので、啓の後を追いかけて教室を出た。

小走りで和弥は啓を追いかけて、ようやく隣に並び次の教室に向う。

「そうだ、お前」

歩きながら、啓に話しかける。

「ん？」

振り向きもせず、そっけない返事が返ってくる。

「昨日のことについて何か心当たりとかないか？」

ダメ元で友人にも聞いてみた。

「俺のいる場所からは何も感じなかった」

最低限の言葉だけで返事が返ってくる。

「そうか……」

期待半分で聞いてみたが、やはり手がかりになるようなことは聞けなかった。

「お前でも感じ取れなかったってことは、相手はかなり大きい組織だってことか」

ただ、今までの状況を整理して和弥は分かることを考えてみる。

何故、こんなことが考えることができるかというと、啓の能力は『プラフェサー』と言われ、一種の予知や先見が出来る能力なのだ。範囲は本人がいる場所から半径10km以内なら大抵の事は予知ができる。

しかし、全て予知できるわけではなく、自分が深く関わる事や知りたいと願ったことだけ出来る。そして現在地から関わる場所の距離が近いほど正確に予想することが出来るが、遠くなると曖昧になっていたり色々制約もある能力である。しかし、深く関わる場合は本人の意思や場所など関係なく鮮明に先見をすることもできる。

なので本人がいる場所にもよるが、もし啓がこの事件に関わることがあるのなら、啓が望まなくても自動的に能力が発動し、何か手がかりあるかもしれないかった。

しかし、相手の能力にもよるので詳しいことはまだ不明のままだ。

「なあ、放課後とか使って調べてみる気はないか?」

「面倒だからやだ。お前もよく関わるよな」。俺が関わるってばかり視えたら、その時は手伝ってやるよ」

相変わらずな答えが返ってきた。

そうなのだ。この少年はこんな能力に似合わず極度の面倒くさがり屋で、自分が関わる最低限のことだけに動いている。返答も最低限なのはこのせいでもある。だから、人助けとかでこの能力が使われることはない。全て、啓に関わる事だけを自動的に予知しているのだ。少しもつたいない使い方な気もするが、これが啓と言う少年の在り方だから仕方がない。

「そうか」。まあ、何か分かったことがあつたらすぐ連絡くれよ」「分かった」

目的の教室に着いたのでここで会話を打ち切り、二人は何事もなかったかのように、普通に授業を受けていた。

予想外の出来事（前書き）

続きます。

予想外の出来事

—— 平和。

そう呼ぶにふさわしい日々が1週間ほど続いた。あまりにも平和すぎて、1週間前の噂などとうに忘れ去られている……

—— 何があつたんだ……！？

和弥はそう考えずにはいられなかった。

毎日のように何かしら事件が発生するこの学園。なのに、あの

出来事以来何も起きないなんておかしすぎる。

「なあ啓、本当になにも感じないのか？」

隣で寝ていた少年に、この1週間幾度となく尋ねた質問を繰り返す。

「……ああ。何も視て無いよ……」

目を開けもせず、いつも通りのそっけない最低限の返事。

最近いつも授業をサボって屋上で寝ている少年を追って今日だけは、和弥もサボっているのだった。

—— あ、またあいつに何か言われるかも……

あいつ……。

この学校の生徒会長であり、和弥の天敵である由佳のことだ。

最近は事件が起こってないせいか、何かと理由をつけては絡んでいていた由佳が何も言っていない。

「浅野がどうかしたか……？」

「……。」

どうやら和弥は声に出したいらしい。

「なんでもねえよ。……さてと。俺はそろそろ授業行くとするか。お前は？」

—— リーン……リーン……

言い終わると同時にチャイムが鳴った。

この学園のチャイムはまるで鈴を鳴らしたかと思うほどに儚く、
小さな音だ。いや、音楽と言った方がいいかもしれない。なんで
も、学園長の趣味だとか……

「俺は今日の授業は出ないよ」

——何の為に来たんだよ！

今度は声に出さないように心でひそかに突っ込んだ和弥は、
「わかった。じゃ、またな」

そう言い残すとその場を去っていった……

この後、和弥の運命を変える事件が起ころうとは知る由もなく……

翌日。

事件は起き、学園中に瞬く間に伝わり屋上にさぼっていて昼寝をし
ていた和弥の耳にも届いた。

昨日の放課後警備員がいつもどおり学園内を巡回していたら突然
何者かに襲撃され命を落としたという。

これはさすがに和弥には予想外だった。

「マジか……？」

和弥はそう呟かずにはすまなかった。

まさか殺人が起こるとは予想だにしていなかったからだ。

「ああ……面倒だな……」

啓はのんきにそんなことを言ってきた。

「おい！どういうことだ！？啓、本当に何も感じなかったのか！」
和弥は激昂し啓を問い詰めるがいつもの調子で啓は言葉を返す。

「……ああ。感じなかったよ。そのかわり、相手がかなりのやり
手ということだ、って言うお前の予想は間違ってたってこと
だな……」

「……………」

「だったら……これは今まで以上に危険だな……。俺が視えない
どうこう抜かしても」

和弥はその言葉に信じられないという顔をしたが啓はいつもと変わ
わらず言った。

「……啓、お前も関わってくるだろうな。例え視えなくても」

「そうだな。現に間接的だが、もう俺は関わってるしな」

今までない大事の事だが、啓は顔色を変えずに頷いた。

「……だな。これ以上あいつに目をつけられたくないから、一応あ
いつに知らせるぞ。お前と同じ能力のやつはこの学園に「ごろごろい
るが、お前以上に先見をできるやつはいないからな」

「……勝手にすればいい」

和弥はまず生徒会室に向かうことを決心した。

たとえどんな報復が待っているとも知らずに向かう。

予想外の出来事（後書き）

また読んでくれるとうれしいです。

不穏な生徒会（前書き）

久しぶりの更新です。

果たしてこの作品は完成する日はくるのでしょうか・・・？

不穏な生徒会

生徒会室は荒れていた。

「か、会長どうしましたよう」

「殺人が起こるなんて!」

「あいつらは何しているんだ!？」

生徒会員がそれぞれ言う。

朝学園で起こった事件のことで室内ではテーブルを円にして囲むようにして言い合っている。

このままだと混乱するばかりだろう。

遂にその光景に見かねた由佳は拳を作りテーブルに思いっきり叩きつける。

―ドゴンッ!

テーブルはへこみ拳大の形が残る。

その音でさっきまで慌しく言い合っていたメンバーは一瞬にして沈黙する。

由佳はメンバーを一瞥し咳払いをして本題に入る。

「皆さん落ち着きましたか？」

まだざわめきがあったがしばらくすると静かになる。

「では問題は三つです。まず一つ目は先週の不審者です」
メンバーはその言葉に息を呑む。

「二つ目は『プラフェサー』の能力者の察知です。ですが何も感じ取れなかったの事です」

由佳は息を整えて言う。

「そして三つ目が犯人が能力者の可能性があるということなんです」
といい終えたと同時にドアが開かれる。

由佳はドアの方を睨んだが、
そこには和弥がいた。

「あれ？もしかして会議中だったのか？」

ただ疑問に思っている様子で聞いてきた。

由佳はこれほどの男を憎らしく思ったことは無かった。

あの不審者の件から色々と隠密に活動し侵入経路や目的をこの一週間調べ上げたのだが和弥はたださぼるだけでおまけに事件を起こしたことを許してしまった。

「そうね・・・今終わったところだから後で表に出てくれるかしら？」

由佳は殺気を含めていうが当の本人和弥は気づかずに返事をした。

「分かった、場所は屋上でいいか？」

「ええっ顔を洗って待っていなさい」

一言交わすと和弥は屋上に向かった。

だがその後の和弥の安否は神のみぞ知るばかりだった。

少なくとも全治一ヶ月の負傷になったのは余談である。

”先見”（前書き）

一旦修正しました。

携帯からの編集難しいです。

”先見”

——時間は少しさかのぼり……

「……流石に、ここまで感知できないのはおかしいな」

和弥が去った後、啓は一人ごち目を閉じた。

いつもは自分が自動的に感知する事だけに受動的に関わってきた。

その中には、過去殺人事件に巻きこまれたことも沢山あった。

その度に、微かな出来事でも啓は感知してきた。

啓は稀にみるくらいの有能な能力者『プラフェサー』である。

今回は学園全体で事件が起き、自分が直接的でなくても間接的に関わっている。

なのに、啓は事件を知るまで事実を知らなかった。

“どんなことも今まで生きてきた人生の中で先見が起きなかったことなど一度も無いのに”。

今までの例を挙げると、小学校の運動会の結果や学芸会の配役、テストの結果などのくだらない事から、親友の生死を彷徨うような事故や直前に誰かが殺されるところなどの深刻なことまで、啓はずっとこれから起きることを誰よりも先に視てきた。

そして、自分にはそれをどうすることもできないことを知っていた。例えば何かをしようとして行動を起こしても見えたものは絶対不変の事実だから。

どう足掻いても変わることの無い決められたものを見続けているだけだから。

この事実を実感したのは親友の生死にも関わる事故を見たときだった。

先に視ることができたから、何か出来るかもしれないと思った。

何も疑うことなく、啓は親友を助けるために、その事故現場に行った。

たどり着いた時はまさにその”視た”事故が起きる寸前だった。

そして、啓は事故が起きる瞬間を文字通り見た。

予知したとおりに事故を自らの目で見た。

何も変わることなく、一瞬の狂いもなく、目の前で初めて啓は惨劇を目にしたのだった。

今までと同じように、予知したことを見ただけだったのに…。

それから、啓は自分の能力の認識を変えた。

例え視えたとしても、何も出来ないことを知ったから。

今まで視てきたこともこれから視るかも知れない事も、全て変わらないことだと知ったから。

だから、啓は自分から能力を使うことを止めた。“何も出来ないのならば、最低限のことだけを見ればいい。

そうすれば、何も出来ない自分を見るも無いのだから。

傷も深くないはずだから”。自然と、啓はそう思うようになっていった。

それから啓は自分から視る事は無かった。視ても何もできないからだ。

助けることも変えることも自分には何も出来ないからだ。

あの事件から啓は能力を過信することも謙遜することも無かった。

そして、最低限の力だけを使ってきた。

自然に見てることだけでいいと、無意識の内にの願っているから…

「……久しぶりだな」

一通りの回想を終え、閉じた目を開ける。

そこには、さつきと同じ景色が広がっていた。

変わることの無い、晴天といえる青空が広がっている。

「……変わらない、か」

ふう、と一息ついて再び目を閉じる。

——自分から力を使うのは小学校以来だな。

目を閉じて思うのは、今までの事。

小さい頃の力を使って視た事、親友の事故を見て何も出来ないを知

つたときの衝撃、今回の事件の異変。

そして、これから起きること。

今までは、視たいなんて願わなかった。

何も出来ないなら視ないほうがいいと思ってた。

だけど、今回の事件は違う。

視ようとしないと、相手のプロテクトが掛かり何も視えてこない。

これは自分が関わらないという保証はない。

もしかしたら、視えたかも知れない事まで見落とすことになる。

それは、視えた事を変えられなかったことよりも辛いだろうから、それはなんとしても避けたいことだから。

だったら、自分が出れることは何かしておきたい。もう二度と後悔しないために…。

——願えば視えるというのなら、これから起きることを全て俺に見せる。

視えないものまで俺は視えるまで願い続けてやる。

念じながら、啓はふと思った。

もしかしたら、この能力は隠されて見えないものを視るための能力なのかもしれない。

そして、少しずつ視え始めた…

「有能すぎるのは、危機を高めるだけですよ」

その時、知らない男の声が耳元に聞こえた。

「誰だっ」

視るのを止め顔を見ようとしたが、男は振り向く間も与えず、啓の首を手刀で叩いた。

「なっ・・・」

そのままゆっくり啓は倒れていく。

「少し焦りましたね…。あの方の『シュウタス』に気づくとは、かなり有能な能力者みたいですね」

男は倒れた啓を抱え音を立てる事もなくまるで何事もなかったかのようにその場からいなくなつた。

啓はどいへ？（前書き）

更新しました。

啓はどこへ？

2人が啓を探し始めて数分後。
理科室での出来事。

由佳がふと顔を上げると、目の前に白骨化した死体が……

「きゃ~~~~~!!!!!!」

静寂が由佳の叫び声によって破られた。

そして、叫んだと同時に和弥に抱きついた。

「お、おい……、これ、白骨標本……なんだけど……って、聞いてる？」

——ギューッ

由佳は和弥の声が聞こえないのか、抱きついたまま離れようとしな
い。

「……わ、わた……こ……ダ……よ……」

身体が震えているのだろう、声まで震えている。

「……ごめん。もう1回言って？」

「……わ、私、怖いダメなのよ……!」

——え……？あの成績優秀、容姿端麗な生徒会長が……？

由佳は和也の腕の中で未だに震えている。

「もう、大丈夫……だから……。」

和弥は戸惑いながらも由佳を強く抱きしめた。

——数時間後……

「はぁ……はぁ……もう……!……どこにいるのよ……!……」

「さあ……な……。」

屋上に、和弥と由佳の姿があった。

2人はあの後もありとあらゆる場所を探した。

それはもう、学園の隅から隅まで……。

こんなトコにはいないだろうと思われるところまで探した。

だが、2人の努力も空しく啓は見つからなかった……。

啓が連れ去られたことを2人は知らないのだから、仕方が無いと言えは仕方が無いのだが……

とりあえず2人は屋上に戻ってきたのだった。

2人共疲れているのか会話が無く、しばらく静寂が続いた。たった数分のコトだったが、2人にはとてつもなく長く感じたのだった。

まるで、永遠に時間が止まったかのように……

永遠に、啓が帰ってこないかの様に……

先に静寂を破ったのは由佳だった。

「ねえ。なんか焦げ臭くない？」

かすかだが、生き物でも焼いているような嫌な臭いが漂ってきた。

「行ってみよう!!」

言い終わると同時に、和弥は駆け出した。

「ちよ……待ちなさいよ!!」

あわてて由佳も後を追った。

2人が辿り着いたのは「理科室」

……さつきは誰もいなかったはずだよな……？

中からは話し声が聞こえてきた。

啓はどこへ？（後書き）

次の更新は週末……にするはず。

”生徒副会長”

「今度は叫ばないでくれよ」

数時間前に理科室にあった標本は避けておいたが念のため言っていた。

「失礼ねっ」

由佳が不本意だと言わんばかりに言ってきたがひとまず放置し和弥はこっそり聞き耳を立てるように扉の前に近づく。

由佳は和弥の行動にいい顔をしなかったが今回だけは流石に事態が事態なだけに何もいってこなかった。

ドアの隙間から覗くと理科室には二人の男女が実験台テーブルに向かい合うようにして座っていた。

一人の少年は身長は平均でとりわけ特徴のない細い目をした生徒であり腕章についた『生徒会副会長』と書かれている。

一方の少女はショートヘアの髪型で眼鏡を掛けておりどこか近づきがたいオーラを出していた。

和弥達はその二人を知っていた。

そう彼らは学園でももっとも有名な二人組みだった。

———よりによってあの二人かよ。

と和弥が思っていたら会話が再開される。

「やれやれ面倒なのが来たものだね」

細い目をした少年は話す。

少年の名は久遠ミツルくとうと言う。

そして由佳の補佐をする副会長だ。

なぜ久遠が放課後の臨時召集に応じずにここにいるかは分からないがわざわざ理科室で話すのか由佳に理解出来なかった。

——にしてもいつもあの二人は一緒にいるわよね。
由佳はただそう思った。

一方、和弥は一言も逃さぬとばかりに目を血走らせ聞き耳立てている。

——見る人が見たらなんと言うかしらね。……ただの怪しい人ね。

だが廊下には誰もいなかった。和弥はひとまず放置することにして由佳も集中することにした。

「そう」

そっけなく答えた声は由佳も和弥も知る人物で学園でも博識があるとして知られる有名な優等生高田美穂。

成績は学年でも常に上位5位に入る。

和弥はあまり勉強出来るほうではなく、上位5位となるとあまりにも別次元の人間に見えて苦手意識が出来ていた。

久遠は高田の反応にさほど気にするわけでもなくそのまま会話を続ける。

「まあ僕としては”彼ら”が小松啓をなんとかしたかった理由は分からなくもないけどね」

和弥はその言葉にすばやく食いつく。

——なんだと？

気づく様子もなく言葉を紡ぐ。

「彼らの狙いはおそらく”空の戒書”だろうね」

——空の戒書？

初めて聞く単語だった。

「……なんですって？」

久遠の答えに由佳はいつの間にか扉を開け二人の前に出てきていた。

その様子に気づいて和弥も慌てて遅れて出てくる。

「馬鹿！なんでも出たんだよっ」

抗議するが由佳は一瞥するだけで答えずに肩をすくめて笑っている
久遠へと近づき胸倉をつかみ上げる。

「……久遠君」

「やれやれ相変わらず怖い顔をするね」

般若の如く詰め寄る由佳に久遠は余裕たっぷり笑顔で返す。
和弥は本心焦っていた。

——おいおい由佳が切れたらやばいぞ。

かつて由佳が切れた事があり思い出すのも恐ろしい……

「……何故それを知っているの？」

搾り出し出てきた言葉は一言だけだった。

和弥はその単語を聞くのは初めてだったが様子を見る限りかなり由佳の逆鱗に触れるような言葉だったらしい。

久遠は細い目を少し開ける。

「何故って？君も知っているだろう？僕の能力を以って駆使すれば
さやすいさ」

「……そうだったわね。さすが『エニグマ』ね」

一言二言の会話が終わると由佳は溜息をはき、久遠の胸倉を離す。
和弥はその様子にただ見ていることしか出来なかった。

「おい、由佳『エニグマ』って能力の名前か？」

和弥の言葉に由佳はあからさまに嫌そうに顔を歪め鋭く和弥を睨む。

――殺気！

どうやら由佳にとって不快な質問だったらしい。

「……聞いたら、殺すわよ」

由佳はこれ以上ないくらいの笑顔で答えた。

和弥は聞くことを渋々と断念した。

「さて初めましてかな？一年C組十八番高橋和弥君」

「……どうも」

席に半ば座るざるを得なくなった和弥は目の前にいる掴みどころのない男久遠ミツルとかいう男を凝視していた。
どう相手すればいいのかわからないのだ。

「僕は生徒会副会長久遠ミツル。そしてこっちは高田君だ」

「……よろしく」

久遠に紹介され遅れながらも高田の返事が返ってくる。

――ていうかこの二人一体なんなんだ？ さっきから由佳の關係とか啓の話とかどうしているんだよ。

和弥がそんなこと思っていると。

「高橋君のことはいつも生徒会長から聞いているよ」

――……まじかよ。由佳のやつこんな得たいの知れないやつに俺のこと話していたのか。

ふと由佳の方を見たら久遠とかいう男が話をし始めてから一度も視線を合わせていない。

和弥にはこの光景が珍しかった。

和弥の知る由佳はいつも負けず嫌いで見逃せないことがあれば否が応でも突っ込む、そんな人物だったはずだ。

けど今は久遠を避けるようにして久遠からはなれ遠くから様子を見ていた。

——そんなに厄介な人物なのか、久遠ミツルっていう人物は？とんでもない能力を持っているとか？

「僕的能力がそんなに気になるかい？」

そんなことを思っていたらまるで見透かすような声が響いた。

和弥はギクツとした。

「・・・なっ」

久遠はそんな和弥の様子を見ておかしく笑う。

「くつくつ、君はわかりやすいね」

その声はどこもおかしくなさそうに笑っている、そんな気がした。

「…………悪かったな」

和弥はただそう返すのみだった。

「さてまず君の友人小松啓のことだが居場所に思い当たりがないわけでもない。ここからは僕の完全な推測になる。その推測をどう捉えるかは君の好きなようにするといい」

さっきの飄々していた雰囲気は消え去り無機質な声になり別人のようにな変わった。

思わず和弥は内心で驚愕する。

——なんだ？いきなり雰囲気かわったぞ。

そんな心境を無視して久遠は話す。

「君も知っているとと思うけど小松啓は学園でも予知や先見が出来る学園でも希少な能力だからね。そう”彼ら”はその能力が邪魔だったんだろうね。それで刺客を送り小松啓を始末した。といっても死んではいけないけどね」

最後の一言は和弥が椅子から勢いよく立ち上がるのが見えた為、追加したものだ。

「なぜそれが分かるっ？」

勢いよく怒鳴ってしまう。

和弥はどうしても啓のことが心配でこの気持ちを抑えることは出来なかった。

啓は和弥の唯一の友人だ。

何度も啓に助けられたことあるしなによりも一人身の和弥を友人として付き合ってくれているのだから決して死なせるわけには行かない。

「……………」

そのとき和弥は目の前にいる久遠の纏う空気の質が変わったことに気づいた。

まるでいつでも黙らせる事が出来るそんな雰囲気を持っていた。

「君の言いたいことも解るがとりあえず座っとけ？」

そう命じただけで体が勝手に座るように動きそのまま席へと着く。

「いいかい、今は君の話は聞いていないよ？大切なのは事実だけだ。小松啓は生きている。この学園からそうは離れていない。なぜなら奴らに小松啓は殺すメリットがない、なぜなら小松啓の持つ『プラフェサー』はあくまでもサポート向けの能力であり戦闘向けじゃない」

その言葉に和弥はうつむく。

冷静になって考えてみればそうだった。

確かに啓の能力はあくまでも補佐的な能力にしか過ぎない。

それ以外を除けば身体能力はただの男子学生と変わらない。
いや、下手すると並の男子学生以下かもしれない。

そう大人なら誰でも啓に勝つことができるのだ。

「それに小松啓の生体反応はまだある。何故それが分かるという質問は今はないだよ。これも推測になるが目星ついている場所が三ヶ所ある。まあ彼らの位置までは分からない、すまないね？一つはここから離れた部活棟、二つ目は男子寮、そして最後に科学研究所だ。多分他はダミーだろうね。いるのは部活棟だ」

久遠はそこまで言い終えてここまで何か質問はあるかい？といいたげな顔をする。

——何故部活棟なんだ？

そんな疑問を読み取ったのか久遠の口が開く。

「君が言いたいのは何故部活棟か、だろ？簡単なことさ。部活棟は未だに使われていない場所がある上に広い。可能性としては高い。それに数日前から使われていないエリアに人が立ち入ったとされる痕跡があるという情報があるからね」

和弥は目の前にいる久遠ミツルという男に驚かされた。

わずかに短時間でここまで啓のおおよそな場所を割り当てた。

だが由佳はまだ納得してないのが質問を投げかける。

「情報源はどこなの？」

「僕にはとある情報屋がいるからね」

「……御堂君ね？」

「さあね」

由佳はもうそのやり取りだけで気が済んだのか何もいってこなかった。

「……いつてみるか」

和弥達は早速今度こそ友人を救うべく理科室を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3844b/>

『学園 - 秘められた物語 - 』

2010年10月14日12時07分発行